

「ジュエリー学」の勧め

ジュエリー学とは何か

ジュエリー学とは、「宝石学」でもなく「宝石販売学」のことでもない。

ジュエリーとは、もともと「素材」+「デザイン」+「細工」、それにさらには「ハナシ」が付いていれば、さらに良いもの。そのなかで、デザイン、それに細工について勉強しようという私の造語である。

実際のデザインや作りのうち、99%は過去の遺物からの焼き直しであって、それに1%程度の新しいアイデアが加わったものの繰り返しに過ぎない、特に近世では、その比率が高い。この1%を出せるデザイナーは極めて少ない。近世以降であれば、カステラーニ、ジュリアーノ、ファベルジェ、ファーンハム、カルティエ三兄弟、ヴェルドーラ、JAR、ケヴィンコーツ、などに過ぎない。

したがって、優れたデザインを出すには、過去の遺物や歴史についての、持っている知識の総量が、善し悪しを決めると言っても間違いではない。海外のブランドが、商売上のいかさまめいたことをしながらでも、次々に新作を繰り出せるのは、この知識、歴史、記録、経験の差にある。

日本では素材についての勉強だけは進んだ。これは一種の跛行である。

ジュエリーの美しさを作るものは、もちろん素材の美もあるが、基本はデザインと作りがもたらすもの。そこの勉強なしで、何を売ろうと言うのか。

ジュエリー学とは、素材の勉強ではないもの、つまりデザインと作りについての勉強、それも過去の作品やジュエリー以外のものから学ぶこと思っていただければ良い。

具体的には、

過去にはどんなジュエリーがあったのか、それを今にどう利用できるのか。

過去のデザイナーたちは、ジュエリー以外の分野から、どのようにアイデアを取り、どう利用したのか。

ジュエリーの歴史は幅広く、長い。

人間が使う道具のなかで、最古のものの一つ。装身具、食器、祭器。

ジュエリーの使用をしてこなかった民族はない。

唯一の例外が奈良時代から明治の始まりまでの日本人。

したがって、使われた素材、技術、デザインのどれをとっても、同じもの、あるいは酷似したものは、ほとんどが過去のどこかに存在している。新しい自分のデザインと思うのは、無知と不勉強の結果でしかない。こうなる理由は：

教育面では：何故日本のジュエリー界は、過去のジュエリーについて勉強しないのか。すぐに役に立つこと、例えばデザインのレンダリングなどを教え、それが出来ればデザイナーさん、一丁上がり、という教育に問題あり。

実務面では：デザインコンテストの弊害。コンテストで入賞するデザインは描き方があり、そのほとんどは商品にならない。ダイヤ、プラチナ、金の世界三大コンテストの審査員をやってみて、痛感する。デザイン決定者の能力に問題。

商売面では：分かり易く、すぐにでも売れそうなジュエリーを作ることだけを追求する。その結果、ちょっとは売れてもすぐにダメになるジュエリーの山が出来る。デザイナーと言うよりも、業界トップの問題かも。

歴史的には：いま、世界的なデザイナーで、デザインの描き方を勉強しただけで一流のデザイナーになった人はいない。問題は、デザイン以前の教養の問題。日本の教育そのものに問題があるのだが。

教養の大事さ、教育とは違う、教養とは何か。

自分の仕事と関連や利害のないことについての、経験と知識の総量。

無駄の効用はその一つ、それを知らない。

宝石業は文化産業の一つである。

何を、どう学ぶのか。

日本におけるジュエリー学の難しさ、現物がない、図書室も資料館もない、ジュエリーを所有する美術館がない、中心である欧米に遠い。それを前提にして：

ジュエリーの歴史で中心となるのは、エジプト、メソポタミアからギリシャ、ローマを経てのヨーロッパである。

基本図書（各一冊のみを挙げる）

エジプト

Alex Wilkinson ANCIENT EGYPTIAN JEWELLERY 1971 London

ギリシャ、ローマ

R.A. Higgins GREEK AND ROMAN JEWELLERY 1961 London

中世

Ronald Lightbown MEDIAEVAL EUROPEAN JEWELLERY

1992 London

ルネッサンス

Yvonne Hackenbrooch RENAISSANCE JEWELLERY 1979 NYC

近世

Ernie Bradford FOUR CENTURIES OF EUROPEAN JEWELLERY

1953 London

ヴィクトリア

Shirley Bury JEWELLERY 1789—1910 2 vols 1991 London

アールヌーヴォーとアールデコ

Vivienne Becker ART NOUVEAU JEWELRY 1985 London

L Mouflage ART DECO JEWELRY 2009 London

20世紀以降

Graham Hughes MODERN JEWELLERY 1963 NYC

Barbara Cartlidge TWENTIETH CENTURY JEWELRY 1985 NYC

ヨーロッパ以外のエスニックなもので意味のあるのは

ノマドと呼ばれる遊牧民

基本図書 NOMADS OF EURASIA 1989 Los Angels

トルコ、ペルシャを含む中近東

基本図書 トプカプ宮殿博物館 宝物館 1980 東京

インド

基本図書 Oppi Untracht TRADITIONAL JEWELRY OF INDIA
1997 London

中南米の先住民族

基本図書 THE ART OF PRECOLUMBIAN GOLD 1985 London

革命以前のロシア

基本図書 Gerald Hill FABERGE AND RUSSIAN MASTER
GOLDSMITHS 2008 NYC

インド以外のアジア、中国、朝鮮、オセアニア、アフリカにもジュエリーはあるが、今のジュエリーデザインに応用のきくものは少ないと思う。

技術について

基本図書 Oppi Untracht JEWELRY CONCEPTS AND
TECHNOLOGY 1982 NYC

どうすれば、難しい環境のなかで、少しでも学べるのか。

一番の難しさは、美には論理がない、ということ。美とは感覚であり、その計測あるいは説明が、理屈ではないこと、これが最大の難しさである。それを前提として：

よくも悪くも、出来るだけ多くの作品を見る、触る、本を読む。

美術館、博物館、展覧会を欠かすな。一月に一度も、どこにも行かないなら、デザイナーになる資格なし。

海外に行ったら物見遊山よりも美術館、カタログを買え。

クラフトの図書館を利用しろ。

悪いものも反面教師として役立つ—いろいろなフェアが役に立つ。

近代におけるデザインの行き詰まり—過去の歪曲か独善への道—刺身の安倍川化。

別紙として、普通の本にはあまり掲載されない、いくつかのジュエリーをカラーコピーで付属する。